

# CFAフラン硬貨が教えてくれること

— コミュニケーションとしての決済、通貨に込められた歴史 —

佐藤 章

複数の国々で使われる通貨としては欧州共通通貨ユーロが有名だが、西アフリカにも同様の共通通貨が存在することをご存じだろうか。その通貨の名は「CFAフラン」(「セーファーフラン」と読む)である。この通貨の成り立ち、硬貨をめぐるエピソード、歴史について順にみていこう。

## ●西アフリカのCFAフラン

CFAフランは、西アフリカ通貨同盟(UMOA)に加盟するセネガル、コートジボワール、マリ、ブルキナファソ、ニジェール、ベナン、トーゴ、ギニアビサウの八カ国に暮らすおよそ一億人の人びとが使用する共通通貨である(加盟国の位置は地図を参照)。CFAフランを発行しているのは、加盟国共通の中央銀行である西アフリカ諸国中央銀行(BCCE)

地図 西アフリカのCFAフラン使用国



筆者作成

AO)である(以下、「西アフリカ中銀」と記す)。現加盟国のうち、一九九七年に新規加盟したギニアビサウ(旧ポルトガル領)以外はすべて旧フランス領である。なお、「CFAフラン」という名称の通貨は、中部アフリカの旧フランス領諸国でも使われている

が、こちらは中部アフリカ通貨同盟(UMAC)に基づいて設置された中部アフリカ諸国中央銀行(BEAC)が発行する別の共通通貨で、紙幣や硬貨のデザインも異なる。中部アフリカのCFAフランは歴史や現在の交換レートなど、西アフリカのCFAフランと共通するところが多いが、本稿では基本的に、西アフリカのCFAフランについてのみ述べる。

## ●フランスとの結びつき

西アフリカのCFAフランは、もともと、フランスが西アフリカに領有した九つの植民地(国連信託統治領のトーゴを含む)で、一九四五年から使われていた。一九六〇年までにこれらの植民地は独立を達成したが、大半の国々は独立通貨を発行せず、フランス国庫から一〇〇%の保証が受けられる

CFAフランを引き続き使用した。フランス国庫からの一〇〇%保証は現在まで維持されている。このようなフランスとの関係については、通貨の安定という利点の一方で、過大評価や通貨政策の自主性の欠如などの問題も常々指摘されている。CFAフランはフランス植民地帝国の名残としての性格を色濃く持つ通貨なのである。

またこの点は、植民地期に「アフリカ・フランス領植民地」(Colonies Françaises d'Afrique)を略して命名された「CFA」が、引き続き使用されていることにも象徴されている。ちなみに、現在の公式の説明では「CFA」は「アフリカ金融共同体」(Communauté Financière Africaine)の意味だとされるが、この固有名を持つ共同体が現実存在するわけではない。

歴史を振り返れば、一九世紀に始まるフランスによる西アフリカの植民地化は、それ以前からこの地で使われてきたタカラガイ、金、鉄線などの在来品の交換手段を駆逐する過程でもあった。フランス植民地当局は支払いや徴税を通して公定通貨である植民地フランを半強制的に普及させようとしたが、

二〇世紀の前半になってもなお、植民地フランはしばしば対タカラガイの交換レートで暴落したという<sup>(1)</sup>。近代的な通貨の普及には、大きな困難がともなつたのである。

その困難な取り組みを推進し、CFAフラン圏を作り上げたフランスが、いまやフランス・フランの使用を止めているのは皮肉なことである。CFAフランは創設以来フランス・フランとの固定相場制のもとにあったが、フランスのユーロ導入にともない、CFAフランも、一九九九年一月一日にユーロとの固定相場制に移行した。

ユーロとの交換レートは、ユーロ〇六五五・九五七CFAフランというやや込み入った値である。これはかつての対フランス・フランでの交換レート（二フラン・フラン〇〇CFAフラン）に、ユーロ導入時にフランス・フランに適用されたレート（二ユーロ〇六・五五九七フラン・フラン）を掛けて得られたレートである。交換レートの込み入った値も、フランスとの歴史的な結びつきの産物なのである。

## ●アビジヤンでの硬貨不足

さて、私が主に調査をしている

コートジボワールは、西アフリカのCFAフラン圏で最大の経済規模を持つ国である。硬貨に関してとりわけ印象深いのは、その慢性的な不足ぶりである。

現在発行されているCFAフラン硬貨は、額面が一、五、一〇、二五、五〇、一〇〇、二〇〇、二五〇、五〇〇の九種類である。西アフリカのCFAフラン圏全体で流通している硬貨は、二〇一一年末時点で、合計二八億枚にとどまる（日常的にはほとんど使われない一フラン硬貨を除く<sup>(2)</sup>）。

これに対し、西アフリカのCFAフラン圏とほぼ同程度の人口規模を持つ日本では、八八四億枚にものぼる硬貨が流通している（二〇一二年末時点<sup>(3)</sup>）。CFAフラン圏での人口一人当たりの硬貨の枚数は、日本の三四分の一しかないことになる。CFAフラン圏の広大な面積（およそ三五〇万平方キロメートル）も、硬貨の円滑な流通を阻害する要因である。

コートジボワールでの日々の生活のなかで、この硬貨不足は肌で感じられる。タクシー（西アフリカ有数の大都市である同国の最大都市アビジヤンで外国人が効率よく移動するにはタクシーが重宝）

でも、日常食であるパン（ちなみにフランス式のバゲットで、安価でたいへん美味である）の屋台でも、スーパーでも、「釣り銭がない」という宣言に頻繁に出くわす。

こういう状況を避けるため、滞在中は釣り銭がもらえる機会を逃さず、できるだけ多くの硬貨を手元におくよう心がけるのだが、出番が多い硬貨の手持ちはすぐに払底<sup>ひ</sup>してしまう。そしてまた、タクシーや商店で「釣り銭がない」という宣言を聞くことになる。

## ●硬貨不足への対処法

慢性化した硬貨不足への対処策を、人びとはさまざまに編みだしている。まず、買い手が釣り銭を諦める方法がある。タクシーでもスーパーでも、買い手が「お釣りは要らないよ」といえば、運転手・レジ係は笑顔で「ありがとう」といつてくれる。手取り早く、社交的で好ましい方法である。

反対に、運転手・レジ係の方が端額をまけてくれる場合がある。例えば、請求額が一〇〇フランだった場合に、買い手が一〇〇〇フラン札二枚を出すと、「一〇〇〇フランでいいよ」と、札一枚を返してくれることがある。この場

合は、買い手がつこり笑顔で「ありがとう」という番である。

売り手側は、釣り銭がない場合だけでなく、なけなしの釣り銭を温存したい場合にもこのやり方をとる。慢性的な硬貨不足のなかでは、釣り銭用の小銭を大きく減らすぐらいなら、収入の一部を断念した方がよいという、興味深い判断がここには観察される。

モノを介在させる対処法もある。スーパーや商店ならば、買い手がガムなどの少額商品を追加購入して、代金を釣りが要らない額に近づけるやり方がある。反対に、これはスーパーでよく体験することだが、レジ係が何もいわずに釣り銭と一緒にアメ玉を出してくることがある。レジに十分な硬貨がないとき、レジ係は独自の判断で、釣り銭を出せない分の額をアメ玉に換算するのである。

これは一〇〇フラン程度（日本円で二〇円ほど）の釣り銭不足のときの方法で、通常はおひねり包みの小さいアメ玉が使われるが、不足額が少々大きいときには棒付きキャンディになったりもする。この方法は、客が自発的に少額商品を買増すやり方を、売り手が一方的に行うことに他ならず、

「押し売り」的な側面も持つ行為のはずだが、このやり方に苦情をいう人をみたことは一度もない。

### ●貨幣経済の「端（ハシ）」

釣り銭がない状況でみられるようななまざまな対処法に、私はいつも新鮮な驚きを覚える。日本の生活ではたいていの場合、釣り銭は一円も漏らさずきっちり計算される。買い手はそれを当たり前と思ひ、売り手も釣り銭用の硬貨を怠りなく準備している。

これに対してコートジボワールでは、一〇〇フラン程度の額は、売り手と買い手の対面関係のなかで臨機応変に処理されている。売り手と買い手のどちらが「まける」か、あるいは、釣り銭代わりにモノを使うか、といった選択肢のどれかがあうんの呼吸で決定され、決済が行われている。この決済は、貨幣だけではなく、気前よさや感謝を示す行為やモノなども動員されることで成立している。

このやりとりを体験するとき、私が感じる驚きには、貨幣経済と貨幣を仲立ちとしない経済の境界線上に立つ感覚が含まれている。CFAフランという通貨が流通する貨幣経済圏の「端っこ」に立つ

た気持ちといってもよい。

この体験は私に、本来、決済というものは、貨幣だけで完了するものではなく、貨幣以外のさまざまな媒体を動員した社会的なコミュニケーションに他ならないことを教えてくれるのである。

### ●デザインに込められた歴史

写真は、一CFAフラン硬貨の表面（右下）と裏面（左下）である。表面に描かれているのは、西アフリカ中銀のシンボルマークである。象られているのはノコギリザメで、魚体をくねらせ、写真下方に向かって頭部を伸ばしている。頭部には人面とおぼしき目鼻がついており、仮面のような趣もある。このマークは、CFAフランのすべての紙幣と硬貨に記されている<sup>(4)</sup>。

このマークは、西アフリカの歴

写真 1CFAフラン硬貨



筆者撮影

史と関係がある。先述のとおり、植民地化以前のこの地域では、金と銀の交換手段のひとつであった。この地域は古くから金の採掘が盛んで、サハラ砂漠を越えてアラブ地域にも大量に輸出されていた。西アフリカに広大な版図を築いたマリ王国のある王が、一四世紀にメッカを巡礼した際、一トンを超える金を持ち込み、メッカ経済を数年にわたる深刻なインフレに陥らせたという逸話もある。

西アフリカ沿岸部のアカン語系の諸民族では、こうした金流通を背景に、金の重さを量る真鍮製の分銅が、幾何学模様や動物の姿などを象った工芸品として発達した。西アフリカ中銀のシンボルマークは、このアカンの分銅の代表的な意匠のひとつをもとにしている。つまり、このマークは、植民地化以前から西アフリカが生みだしてきた富の象徴なのである。

この歴史的な意味合いを持つ意匠が、近代的な貨幣に刻印されているのを見るたび、西アフリカがこれまでたどってきた植民地化の歴史に思いがよぎられる。CFAフランという通貨は歴史を体現しているのである。

(5) さとう あきら／アジア経済研究所 アフリカ研究グループ)

《注》

(1) Mahir SAUL 2004. "Money in Colonial Transition: Cowries and Francs in West Africa," *American Anthropologist*, 106(1): 71-84.

(2) CFAフラン硬貨の流通枚数は、西アフリカ中銀の二〇一一年の統計年鑑 (BCEAO, *Annuaire statistique 2011*) に掲載された通貨流通高のデータ (一七ページ) から算出した (URL: <http://www.bceao.int/Annuaire-statistique-2011.html> 二〇一三年五月二二日アクセス)。

(3) 日本の通貨流通枚数は、『日本銀行統計』(二〇一三年四月三日付け)。第五〇表「通貨流通高」から算出した (URL: [http://www.boj.or.jp/statistics/pub/boj\\_sv/index.htm](http://www.boj.or.jp/statistics/pub/boj_sv/index.htm) 二〇一三年五月二二日アクセス)。

(4) CFAフランの紙幣と硬貨のデザインは西アフリカ中銀のウェブサイトで見ることが出来る (<http://www.bceao.int/Billets-et-pieces-.html>)。